



辺境貴族の
のんびり三男は
魔道具作って自由に暮らします

YAKO YUKIZUKI

著

雪月夜狐

ill

saraki

レオン

エルヴィンの
学友で、快活な
性格の少年。
剣術が得意。

リヴィア

エルヴィンの学友で
商家の娘。
素材に対する
知識が豊富。

カトリーヌ

エルヴィンの学友。
成績優秀で、
いつも貴族らしく
優雅に振る舞う。

カール

エルヴィンの父で
シュトラウス家の当主。
責任感が強く
厳格ながらも
家族思い。

エレナ

エルヴィンの母。
優雅で知性に
あふれる女性。

エルヴィン

本作の主人公。元はしががない
エンジニアだったが
辺境貴族シュトラウス家の
三男に転生した。
前世からの想いで
モノ作りに情熱を
燃やす。

リリィ

エルヴィンの妹。
天真爛漫で
兄のことが
大好き。



CHARACTERS

平凡なエンジニア、異世界の貴族に生まれ変わる

僕の名前は渡辺悠一^{わたなべ ゆういち}。どこにでもいるような平凡なエンジニアだった。中小企業で工業技術者として働き、坦々と過ぎていく毎日。けれど心の奥底には、どうしても捨てきれない思いがあった。

——もっと自由に、好きなものを作りたい。誰かの役に立つ発明を作りたい。

そんな願いを抱えながらも、夢を実現するために独立する勇氣は持てなかった。

しかし……ある日の帰り道、仕事を終えて自宅へと向かう途中で、僕の人生は突然終わりを迎えることになる。

交差点を渡ろうとしていると、トラックが猛スピードで突っ込んできた。気づいたときにはもう遅かった。

「これで……終わりか……？」

視界が真っ暗になり、意識を失ったと思った次の瞬間——僕は目を覚ました。

目を開けると、木製の天井が見えた。

見慣れない感触と空間。ふと自分の手を見た瞬間、衝撃が走った。

「ふにふにしてる……？　なんだこれ？」

部屋にあった鏡を覗き込むと、五歳ほどの少年が映っていた。短めのプラチナブロンドに砂金色が混じる髪と薄い青灰色の瞳を持つその幼い顔立ちには、違和感しかない。

「これが、僕……？」

僕は困惑しながらも、少しずつ状況を理解しようと思いを巡らせ、周囲を観察して情報を集めていった。

しばらく経って、僕はこの世界で自分が名門貴族シュトラウス家の三男、エルヴィン・シュトラウスとして生まれ変わったことを理解した。

シュトラウス家は北部を治める辺境伯で、当主である父のカールは冷静沈着で厳格だが、公正な領主だった。家族への愛情を忘れず、実績や誇りを重んじる姿勢には威厳があった。

兄さんたちも頼りになる。

長兄のアレクシスは責任感が強く、父上に似た威厳を持ちながらも弟の面倒をよく見る頼れる存在だ。

次兄のリヒャルトは知的で柔軟な考え方をする優しい気質で、僕の試みを面白がりながら応援してくれる。

母のエレナは穏やかで優雅ながらも芯が強い人で、僕の自由な発想を尊重しながら温かく見守ってくれている。

こんな家族に囲まれて、前世の僕にはなかった「家族のぬくもり」を実感していた。

どうやらこの世界は中世ヨーロッパ風の文化らしく、現代の日本にあった家電みたいなものは見当たらない。

しかし魔法というものが当たり前に存在していて、それに関連した独自の技術体形が発達している。

僕が特に心を引かれたのは、魔法と技術が融合した『魔道具』。図書室で見つけた古い書物には、『魔道文字』によってこれらの道具を制御する仕組みが記されていた。

「これだ……！ 前世の知識や技術と、この魔道文字を組み合わせたら、僕にしか作れないものができるかもしれない！」

胸の高鳴りを覚えた僕は、この新しい人生で魔道具作りに挑戦することを決意した。



何日か経ち、異世界での生活に少しずつ慣れてきた頃、僕はふと思いついた。

何か、自分で作れるものはないだろうか。

前世の知識とこの世界の魔道具を組み合わせれば、きっと新しいものが作れるはずだ。

自分の手で何かを作ってみよう。

そう考えた僕は、まずは簡単なランプの製作に取り掛かった。

屋敷の倉庫に足を運んで、材料を探していると、執事のロバートが静かに声をかけてきた。

「坊ちゃま、何かお探しでしたら、倉庫の材料はこちらで揃えましょうか？」

ロバートの提案に助けられながら、僕は木材や古びたガラス瓶、そして『魔力鉱』という素材を選び出した。

これらは魔道具の核になる重要な材料だ。

「その木材ですね、坊ちゃま。少し硬めですが、加工しやすいですよ」

ロバートの助言を受けて、僕はまずランプの台座を作ることから始めた。

小さな刃物を手に取り、木材を慎重に削って形を整えていく。

次に「光」の魔道文字を彫り込む作業に取り掛かったが、これが思ったよりも難しい。ぶにぶにとした幼い手では細かい作業が大変で、何度やつても文字が歪んでしまう。

「くそ……こんな簡単なこともできないなんて」

小さな手で何度もやり直しながら、僕は必死に作業を続けた。

こうしていると、前世の工業技術者としての記憶が蘇る。

失敗しても、何度でもやり直せばいい——そんな言葉を自分に言い聞かせながら、集中力を切らさないようにする。

メイドのマリアが食事を運んできてくれるが、僕は食べるのも忘れて黙々と作業を続けた。

「坊ちゃま、大丈夫ですか？ 休憩を取られてはどうでしょう」

背後からロバートの心配そうな声が聞こえたが、僕は手を止めずに答える。

「ありがとう、ロバート。でも、もう少しで完成しそうなんだ」

「その熱心さは見事ですが、無理は禁物ですよ」

彼の静かな助言に少し笑いながら、僕は作業を続けた。

——木材を削り始めてから数時間。

夜が更けた頃、ようやく納得のいく仕上がりになった。

次は魔力を込める作業だ。この段階に進むまでに半日以上を費やしたが、焦らず慎重に進めることを心がけた。

魔力鉱を台座にはめて、指先から少しずつ魔力を流し込む。すると、魔道文字が淡く輝き始め、ランプが光を放った。

「やった……！ 成功だ！」

この世界で初めて自分の手で作った魔道具。僕の胸に達成感が広がった。

その様子を見ていたマリアが拍手をしながら駆け寄ってきた。それは、前世で夢見た「自由にものを作る」願いが叶った瞬間だった。

翌朝、僕は完成したランプを応接室に集まった家族に見せた。

「これ、僕が作ったランプなんだ！」

アレクシス兄さんとリヒャルト兄さんが興味津々といった様子でランプを見つめる。

「エルヴィン、お前はまた子供なのに、もうこんなものを作るのか」

「おおっ!? これ、ただの灯りじゃないな! しかも、熱くないのか?」

盛り上がる兄さんたちを見守りながら、父上は深く頷いて、優しい声で言った。

「エルヴィン、お前が一人で作ったのか。見事だ。その探究心をこれからも大切にしろ」

「はい、父上!」

家族の温かい眼差しに、心が満たされる。

このランプが僕にとって大きな一歩になった。



——次はもっと実用的なものを作りたい!

ランプの成功に満足せず、僕は次なる挑戦に取り掛かった。

今度の目標は『光のランタン』。

まあ、この際名前はなんでもよかったんだけど……持ち運びができて、点灯・消灯を簡単に切り替えられるものを作ろうと考えたのだ。

「さて、次の材料はどれにしようか……」

倉庫で材料を選びながら、僕は作りたいもののイメージを頭の中で膨らませていた。

ロバートが手際よく木材や金属フレームを運んでくれる。

「坊ちゃん、こちらのフレームはいかがですか? 軽くて加工しやすい素材です」

「ありがとう、ロバート。それにするよ!」

僕は木材と金属フレームを手に、ランタンの枠を組み立て始めた。

次に魔道文字「光」と「操作」を組み合わせ、スイッチで光を調整できる仕組みを設計することにした。

そこから丸二日、僕は何度も失敗を繰り返した。

「これだと光が安定しない……どうすれば……」

作業場で頭を抱える僕を見て、マリアが心配そうに声をかけてきた。

「エルヴィン様、大丈夫ですか? 少し休まれては……?」

「ありがとう、マリア。でももう少しで答えが見つかりそうなんだ」

「それなら、お茶をお持ちしますね。頑張りすぎて倒れないでくださいね」

彼女の気遣いに感謝しながら、僕はさらに集中力を高めていった。

試作を重ねる中で、光を効率よく発するには魔力の流れをさらに安定させる必要があると気づいた。

しかしどうやってそれを実現するかが分からない。

何か状況を打破するアイデアはないかと足を運んだ図書室で、僕はある一冊の本を手取る。

そこに記された『魔力連結』^{まりよれんけつ}という技術に目を付けた僕は、それを応用して複数の魔力鉱を連結させる方法を取り入れてみた。

そしてようやく、光のランタンが完成した。

「これなら長時間使えるし、実用的だ……！」

手に取ると、その軽さと持ち運びやすさに自分でも驚いた。

その瞬間、達成感と次への挑戦心が湧き上がる。

しかし、さすがにもう夜も遅くなっていたので、僕は興奮を抑えつつ、その日は床に就いたのだった。

翌朝、ランタンを手にした僕を見て、ロバートが微笑みながら労ってくれた。

「坊ちゃま、よく頑張りましたね。ぜひ、皆様にお見せください」

ロバートの後押しを受け、僕は家族の前で光のランタンを披露する。

それを見て、リヒャルト兄さんが驚きの声を上げた。

「エルヴィン、お前の発想は本当に面白いな！」

マリアもそばで興奮気味にランタンを覗き込み、目を輝かせている。



「エルヴィン様、本当にすごいです！ これ、どこでも使えそうですね！」
「ありがとう！ もっとすごいものを作るよ！」
家族の励ましに背中を押され、僕の心には次の挑戦への情熱が湧き上がった。



ランプを完成させてから、数週間が過ぎた。

僕は変わらず新しい発明に取り組んでいる。

そんな中、僕が作ったランプの話題が市場で広がっているという噂を耳にした。

屋敷の使用人たちの話が自然と市場に伝わり、その評判が商人たちの耳にも届いたらしい。

僕はランプが市場でどう受け入れられているのか、気になって仕方がなかった。

そこへ、ロバートが小さなメモを持ってきた。

「坊ちゃま、領内の商人が訪ねてきております。ちょっとした相談があるようで……」

メモには、領内でよく知られる商人——ハインツの名前が記されていた。

使用人たちの話を市場で聞いた彼が僕のランプを手にしたことで、その評判があつという間に広がったと聞いている。

「相談ってなんだろう？」

少し興味が湧いた僕は、ロバートの案内で応接室に向かい、ハインツと対面した。

ソファアに座っていた彼は、僕を見るなり立ち上がって一礼する。

その態度は、幼い僕を対等な商売のパートナーとして尊重してくれているようだ。

「エルヴィン様、ランプの噂は耳にしております。そこで……実は市場で扱う商品に、新しい工夫を加えられないかと考えております……」

ハインツは僕が作ったランプを指差しながら言った。

「こういった、誰もが便利だと感じる魔道具が欲しいのです。市場全体の評判を上げるためにも、ぜひお力を貸していただきたいのです」

「なるほど……」

僕は少し考え込んだ。

市場で使える便利な道具……すぐにいくつかのアイデアが浮かんだ。

「ハインツさん、しばらく時間をください。何個か試作品を作ってみます」

こうして僕の新たな挑戦が始まった。

まず僕が手掛けたのは、携帯できる簡易加熱器だ。

市場では店舗が密集していることもあって、基本的に火を使うのは禁止されている。

寒い季節でも温かい料理をすぐに楽しめるようにする道具があれば、市場の人々に喜ばれるだ

ろう。

数日かけて、僕は何度も設計を練り直し、いくつもの試作品を作っては改良を重ねた。加熱器のデザインは、何度も試作を繰り返す中で徐々に形になっていった。

手のひらに収まるほどの小さな円筒形で、上部には平らな金属プレートを配置。その下には魔力鉱を収める仕組みを考えた。

側面にはシンプルなスイッチを取り付け、操作すると魔道文字が魔力を活性化させて、プレートが温まる仕掛けだ。

最初に取り組んだのは、魔力鉱の配置だった。

「これだと熱が不安定だな……」

魔力を効率的に流すにはどこに配置するのがベストか、何度も試行錯誤を繰り返した。

次に、熱を効率よく拡散させるための素材選びにも悩まされた。

最初は金属板を試してみたものの、軽量化が必要だと気づき、軽くて熱伝導率の高い材料を探すことにする。

素材の選定にはマリアやロボットが協力してくれた。

「エルヴィン様、この素材なら軽くて扱いやすいかと思います」

「ありがとう、マリア。これを試してみるよ」

その後も僕は試作品をいくつも作り、それぞれ異なる課題が見つかるたびに改良を加えた。

こうして最終的に完成した加熱器は、前世で使っていたUSBヒーターを参考にしたデザインに仕上がった。

この世界特有の素材と魔力を組み合わせたことで、より簡単に実用的な仕組みを実現している。完成した瞬間、これまでの努力が実を結んだという達成感に胸が高鳴った。

何度も失敗を繰り返したが、その過程は楽しく、学びが多かった。

最終的に出来上がった加熱器は、手のひらに収まるほどのコンパクトさで、魔力鉱をエネルギー源とするシンプルな構造だ。

これなら温めるのに十分だろう。

試作品を完成させた僕は、早速ハインツに連絡した。

彼はすぐに屋敷にやってきて、試作品を見せてほしいとせがんだ。

「エルヴィン様、これが新しく作ったという加熱器ですか！」

ハインツは興味深そうに加熱器を受け取り、早速市場での使用を開始すると約束してくれた。



ハインツが市場に持ち込んだ簡易加熱器の評判は瞬く間に広がった。

温められたスープが振る舞われると、市場の客は「すごい……こんなに小さな魔道具で!」「便

利なものがあるものだ！」などと口々に驚きの声を上げたそうだ。

そんな市場の声を耳にした僕は、喜びと自信を胸に刻んだ。

この成功をきっかけに、僕の発明に対する評価はさらに高まり、同時に期待も膨らんだのを感じる。

これに應えるために、僕は連日作業場にこもっての次なる発明のアイデア出しに明け暮れていた。

「さて、次はどんな道具を作ろうかな……」

新しいノートを広げてあれこれと思いを馳^はせていると、ロボットが手にいくつかの書簡を持って現れた。

「坊ちゃんま、最近市場の商人たちから、加熱器への意見が多く寄せられております」

内容を見ると、加熱器に対する要望や、新しい魔道具の提案などが書かれていた。

「なるほど……確かに、持続時間の問題がまだ残っているし、使いやすさについても改良の余地があるな。ありがとう、ロボット」

その課題に頭を悩ませながらしばらく机に向かっていると、今度はリヒャルト兄さんが僕の作業場を訪れた。

「エルヴィン、少し手を休めてみないか？」

リヒャルト兄さんは柔らかな微笑みを浮かべながら、机の上にくくつかの資料を置いた。

それは、王国でも名高い学問の場として知られるカレドリア学院で研究されている、最新の魔道

具の情報だった。

学院では、魔道具の基礎から応用まで、優秀な研究者たちが技術を磨き続けているという。

「これは？」

「カレドリア学院で発表されたばかりの研究論文だよ。魔力効率を上げるための新しい魔道回路の設計について書かれているんだ。エルヴィンの役に立つと思って持ってきた」

リヒャルト兄さんの助言に感謝しながら、僕はその資料を読み進めた。

そこには、魔道文字の配置や魔道回路の組み方が詳細に記されており、僕が抱えていた問題の解決に繋^{つな}がるヒントが隠されていた。

「ありがとう、兄さん！ これなら次の試作はうまくいきそうだよ！」

僕は早速、その新しい技術を加熱器に組み込むべく作業を再開する。

しかし試作を進める中で、どうしても手元にある素材ではまかない切れない部分が出てきた。

すると、ちょうど市場に買い出しに行っていたマリアが、新しい材料を届けてくれた。

「エルヴィン様、こちらは市場で見つけた特別な魔力鉱です。珍しい素材があれば買ってきてほしいとのことでしたが……」

「マリア、ありがとう。これは試してみる価値があるよ……！ この素材なら、持続時間が大幅に改善できるかもしれない！」

マリアの協力もあり、試作は順調に進んだ。

新しい魔道回路と改良された素材を組み合わせた加熱器は、以前よりも格段に性能が向上した。僕は完成した加熱器を、早速兄さんたちに披露した。

「これは本当に素晴らしい。こんなに小さな装置で、ここまで効果的に機能するとは思わなかったよ」

アレクシス兄さんがそう言いながら、加熱器を手にとってじっくりと観察する。

「それでエルヴィン、次の課題はなんだ？」

「そうだね……もう少し取り回しを良くしたいと考えているんだけど」

僕は兄さんたちと意見を交換しながら、新たな挑戦へのアイデアを膨らませていった。

家族や仲間の支えがあるからこそ、僕は次の一步を踏み出せるんだ。



数日後、リヒャルト兄さんが作業場を訪れて、最新の市場の反応を教えてくださいました。

「エルヴィン、君の加熱器は市場でとても評判がいいよ。でも、使いやすさについての要望がいくつか出ているみたいだ」

「具体的にはどんなことを言われているの？」

「たとえば、もっと小型化して持ち運びやすくないかとか、加熱以外の機能を追加できない

かっていう声がある」

リヒャルト兄さんの言葉を聞いて、僕の頭の中で新たなアイデアが浮かび始めた。

「それなら、温めるだけではなくて、調理器具としても使える多機能型にするのってどうかな……？」

その日の午後、僕は早速新しいデザインを描き始めた。

今回目指すのは、加熱だけでなく様々な調理ができて、保温機能も備えた多機能型魔道具だ。

「まずは、どんな機能が必要かを整理しよう……」

僕はノートに必要な要素を書き出して、実現可能な仕組みを考える。

- ・加熱機能
- ・保温機能
- ・魔力消費の効率化
- ・持ち運びやすいデザイン

「これを全部詰め込むのは大変そうだけど、やりがいがあるな……」

材料についてはロバートが事前に手配してくれている。

「坊ちゃんま、こちらに新しく仕入れた軽量素材があります。これが役に立つかもしれません」

「ありがとう、ロバート。それを試してみるよ」

ロバートが手配してくれた素材を使って新たな試作品を作り始めた。

しかし今回は魔道回路をさらに複雑にする必要があるもので、設計段階で何度も行き詰まってしまう。

「ここをこう繋げると……魔力が逆流してしまうのか……」

僕は何度も失敗しながらも、少しずつ設計を修正していった。

試作品が完成したのは、作業を始めてから一週間後だった。

試行錯誤の過程で役に立ったのは、図書室で見つけた古い魔道具の設計図だ。

この仕組みを応用したおかげで、小型で軽量ながら多機能な調理魔道具に仕上がった。

一台で加熱、保温、煮る、焼く、蒸す、茹でる、沸かす、炒める、揚げる、炊くといった調理方法ができる。放つにおいても焦げ付いたりしないように、自動で温度を調整する機能を実現した。

「これならきっと市場の人たちも喜んでくれるはず……!」

僕は完成した試作品の性能を試すために台所へと向かった。

細かな調理の作業はマリアが手伝ってくれた。

適当なサイズに刻んだ肉や野菜を多機能型調理魔道具に入れて、スイッチをオンにする。

するとすぐに魔道具の温度が上がって、香ばしい匂いが漂ってきた。

マリアはその様子を興味深そうに見守っている。

食材を軽く炒めたら、そのまま水と調味料を入れて蓋をする。

三十分ほど放っておくと、見事に野菜スープが完成していた。

「坊ちゃま、本当に素晴らしいです! こんな小さな道具で、いろいろなことができるなんて!」

彼女の言葉に、僕は少し照れながら応える。

「ありがとう、マリア。おかげでまた少し自信がついたよ」

翌日、完成した多機能型調理魔道具をハインツに渡すと、彼はその性能に感心して、早速市場で実演を始めると約束してくれた。



市場での多機能型調理魔道具の反響は予想以上だった。

この魔道具が調理や保温に使われる様子を見た人々からは、「これがあれば家事がもっと楽になる!」などと、驚きと感嘆の声が上がった。

そんな市場での評判を耳にして、僕の胸に新たな挑戦への情熱が湧き上がる。

「もっと画期的なものを作らなきゃ……!」

次にどんな道具を作るべきか、作業場で考えを巡らせていると、ロバートが扉をノックした。

「坊ちゃま、ハインツ氏から新しい依頼が届いております」

ロバートに手渡された手紙には、ハインツの感謝の言葉と共に、新しい魔道具への要望が記されていた。

——エルヴィン様の便利な道具によって、市場の活気が増しました。その中で、飲食系以外の店舗から何か役に立つものを作ってもらえないかと要望が出ています。

「もっと汎用的なものが必要なのか……」

僕は手紙を読みながら、次なる挑戦の方向性を考え始めた。

作業場でアイデアをノートに書き込みながらデザイン案を練っていると、アレクシス兄さんが訪ねてきた。

「エルヴィン、何を考えているんだ？」

「次は業種を限らずに市場全体に役立つようなものを作れないかと思って……でも、それがなんなのかまだ決まらなくて」

兄さんはしばらく僕のノートを見つめたあと、静かに言った。

「市場全体を便利にするなら、物流に目を向けるのはどうだ？」

「物流？」

「物資の運搬や管理だよ。市場の活気を維持するためには、物が効率的に運ばれる仕組みが必要だろう」

兄さんの提案に、僕の中で新たなアイデアが形になり始めた。

前世では物流のインフラは当たり前前に整備されていたから意識していなかったけれど、この世界でどうやって品物が運ばれているのか、僕は知らない。

そこにヒントがあるかもしれない。

翌朝、僕はロバートと共に市場を訪れた。実際に現場を観察することで、どんな機能が求められているのかを調査するためだ。

朝の市場では、商品の搬入のために大きな荷物を抱えた人が慌ただしく行き交っていた。

若い男性の商人はともかくとして、老人や女性、あるいは幼い子供が苦勞しながら重い荷物を運んでいる姿が目に入る。

中には手押し車みたいなものを使っている人もいるが、それでも動かすのに力がいりそうだし、人が多い市場内で小回りがきかなくて扱いづらそうだ。

「坊ちゃま、このような大型の荷物が運ばれる際に、効率的な道具が求められるようです」

「それなら、運搬用の軽量で頑丈なカートを作るのはいかがでしょうか……!?」

ロバートの説明を聞きながら、僕は市場の各所で作業をしている人々の様子をメモに書き留めた。

作業場に戻ると、僕は早速新しいカートの設計に取り掛かった。

必要なのは、軽量化、耐久性、そして魔力を使った補助機能だ。

設計段階では、魔力を利用して荷物を軽く持ち上げる仕組みを取り入れることにした。

さらに、車輪の動きを滑らかにする魔道文字を彫り込み、耐久性を高めるために特別な合金を使用する。

「これなら、どんな重い荷物でも楽に運べるはずだ！」

試作品の完成までには、予想以上の時間がかかった。

しかし、出来上がったカートを見たときの達成感は格別だった。



早速カートの試作品を複数台用意して市場に持ち込んで試してもらったところ、効果は抜群だった。

重い荷物を運んでいた商人たちが次々と驚きの声を上げた。

このカートがあれば、もっと重い物や多くの物資を楽に運べると、市場での評判は上々だったようだ。

改めて自分の発明が人々の役に立っていることを実感しながら、僕は次なるアイデアを書き留めるためにノートを開いた。

しばらくあれこれ考えていると、ロボットが作業場に入ってきた。その手には青白く輝く金属片と、何枚かの紙束を持っている。

「坊ちゃま、こちらの素材に関する資料をご覧ください」

ロボットが慎重な口調で差し出したのは、遠方の鉱山で採掘された『エルメタル』という珍しい金属のサンプルと資料だった。

資料によると、どうやらこの金属には魔力を効率的に通す特性があるらしい。

「エルメタル……こんな素材があったなんて！ これを使えば、もっとすごいものが作れそうだ！」その青白く輝く金属片は不思議と軽く、触れると冷たさとかすかな振動を感じた。

この振動が魔力の流れを通す際の反応だと分かり、僕の心は興奮でいっぱいになる。設計に取り掛かる前に、ロボットが慎重な口調で僕に忠告した。

「坊ちゃま、このエルメタルは非常に繊細な素材でございます。加工時に魔力を流しすぎると破損する恐れがあり、さらに急激な温度変化にも弱いとされています。ですので、作業環境には十分な配慮が必要です」

「ありがとう、ロボット。その注意を踏まえて進めてみるよ」

ロボットの説明を聞き、僕は作業場の環境を確認した。

窓を閉め、気温が安定するように暖炉を調整する。さらに、魔力を少量ずつ送り込むテストも繰り返し行って、エルメタルの反応を慎重に観察した。

それから、僕はエルメタルを使った新しい魔道具の設計に取り掛かる。

まずエルメタルの特性を試すために、小さな板状に切り出すところから始めた。切断には専用の工具を使い、慎重に力加減を調整する。

硬さと繊細さを兼ね備えたこの素材は、少しでも力を入れすぎるとひび割れてしまうため、僕は息を詰めながら作業を進めた。

「ここまで来たら、次は魔力を流すテストだな……」

切り出したエルメタルの板に魔道文字を慎重に彫り込む。

ふにふにとした手で彫刻刀を持ち、丁寧に線を刻むたびに細かい粉が舞い上がる。粉塵を吸い込むといけないので、その都度息を止め、線が歪まないように集中を維持した。

次に、魔力を通すための基盤を組み立てた。

エルメタルの板を木製のフレームの中心に固定し、回路を接続していく。

「これで光が出るはずだけど……ちゃんと動作するかな」

いよいよ試作品が形になり、魔力を流し込む準備が整った。

指先に意識を集中させ、少しずつ魔力を送り込むと、エルメタルが青白く光り始めた。

「やった……！　ちゃんと光った！」

その後も試行錯誤を繰り返し、エルメタルの特性を活かした魔道具が完成した。

軽量で持ち運びやすく、耐久性も兼ね備えたライトだ。光の指向性を上げてより遠くを照らせ

るように、ランタンとは形を変えてある。

このライトはエルメタルを基盤にして、魔力を効率よく光に変換する仕組みを取り入れている。

繊細な性質のエルメタルを保護するために、表面に特別なコーティングを施し、防水性能と耐久性を向上させた。

また、部品の接合部分にも撥水性の素材をシールにして貼って、雨や湿気の侵入を防ぐ工夫を加えている。

最後に全体を高温で乾燥させてコーティングを定着させることで、どんな天候でも使える頑丈なものに仕上げた。

「これなら、どんな環境でも使いやすいはず……！　冒険者みたいな人たちが使うのにもいいかもしれない」

僕はあまり関わりがないけれど、この世界には魔物退治や迷宮探索などを請け負う冒険者という職業の人たちがいるらしい。

このライトなら荷物にならないし、戦闘の邪魔にもならないだろう。

僕は早速ハインツに連絡をとって、冒険者に渡して試してもらうことにした。

王都への道のり

ハインツの推薦すいせんもあって、僕の作ったライトは暗闇の中でも安心して使えると、冒険者たちの間で瞬く間に評判になった。

商品に関する問い合わせも複数入っている。

物流カートとエルメタルを使ったライトの成功が評判を呼ぶ中、父上から突然の呼び出しがあった。

「エルヴィン、今度の王都にはお前も同行してもらう」

突然の話に、僕は思わず首を捻ひねる。

「王都ですか？ 何をしに行くんですか？」

「商談や会合に加え、お前が発明した魔道具を紹介する場を設けた」

父上の言葉に驚きつつも、胸が高鳴った。

王都で自分の発明を紹介できるなんて、夢のような話だ。

「エルヴィン、王都での商談はお前の魔道具を広める良い機会になる。しっかりと準備を整えておくように」

父上の声には、期待と共に少しの緊張感が含まれているようだった。

「はい、父上。今回の発明をしっかりと説明できるように準備します！」

「王都では多くの貴族や商人が集まる。お前の魔道具がどれだけ注目を集めるか、楽しみにしているぞ」

父上は手元の書類に目を通しながらそう続けた。

王都行き話を聞いた僕は、その後すぐに準備に取り掛かった。

初めてのことで勝手が分からないのもあって、ロバートを呼んで手伝ってもらった。

「ロバート、王都に行くにはどんな服がいいかな？」

「坊ちゃま、王都では格式が重んじられますので、子供であってもきちんとした礼服が良いでしょう。ただし、移動の際などは負担にならないように、動きやすさも考慮した軽装を別途ご用意いたします」

ロバートの助言に従って礼服を選ぶ。その最中も、王都で何を見て、どんな人に会うのかを想像するだけで胸が躍おどった。

「坊ちゃま、道中には山道もございますので、こちらのブーツもお持ちください」

「ありがとう、ロバート。これで準備は万全だね！」

こうして期待に胸を膨らませながら、僕は王都への旅支度を整えた。

王都への旅は約十日間。馬車に揺られながら、僕は外の景色をじっと見つめていた。

街道沿いには広大な草原が広がり、ぽつりぽつりと小さな村が点在している。村の屋根の煙突から立ち上る白い煙や、畑を耕す人々の姿が目に入り、穏やかな空気に心が癒された。

旅も終盤に差し掛かったその日、同行しているロバートが優しく声をかけてきた。

「坊ちゃま、お疲れではありませんか？」

水筒と軽食を差し出すその手には、旅慣れた余裕が感じられる。

「ありがとう、ロバート。長旅で少し疲れるけど、王都に着くのが楽しみだよ」

ロバートは微笑みながら頷いた。

「王都には多くの職人や商人が集まる場所もございます。坊ちゃまにとって新しい刺激になることでしょう」

ロバートの言葉に頷きながら、僕は窓の外の景色に再び目をやったのだった。

その日の夕方、馬車は宿場町に到着した。

宿場の喧騒と温かい灯りが、旅の疲れを和らげてくれる。

「エルヴィン、ここでの宿泊は重要だ。しっかり休んで明日に備えろ」

父上は食事の場でも、僕の準備状況を確認するように視線を向けてきた。僕はパンを一口かじりながら、笑顔で頷く。

「はい、父上。魔道具の説明内容も整理しておきます」

父上は満足そうに頷き、ロバートに「明日の出発時間をつっかり調整しておくように」と伝えた。宿では温かいスープと焼きたてのパンが出され、久しぶりの温かな食事に心がほっとした。

「坊ちゃま、明日は山道を越えていきます。早めにお休みください」

ロバートの助言に従い、僕は早々にベッドに入った。

馬車の振動がない静けさに包まれて、僕はいつの間にか深い眠りに落ちていた。

翌朝、冷たい空気が頬を刺す中、馬車は山道に入った。

カーブが多く険しい道に体が振られるが、王都への期待が疲れを忘れさせてくれる。

昼過ぎ、馬車の窓から巨大な城壁が見えてきた。その向こうには壮麗な建物の陰が揺らめいている。

「坊ちゃま、あれが王都の城壁でございます」

ロバートが指差す先には、堂々とそびえる城壁が広がっていた。

「すごい……本当に大きいんだな……」

その光景に圧倒され、僕の胸は高鳴った。

こんな場所で自分の発明した魔道具がどんな評価を受けるのか、期待と緊張が入り混じる。

馬車はゆっくりと王都の門を通り抜け、中央広場へと向かう。

壮大な城壁に囲まれた王都の街並みは、これからの冒険を予感させる活気に満ちていた。

通りにはさまざまな商人や職人が行き来して、威勢の良い声が飛び交っている。

王都の壮麗な街並みに圧倒されているうちに、馬車は中央広場へと到着した。

僕たちはここで馬車を降りて、広場を見て回ることにした。

一足先に下車したロバートが、馬車の扉を開けながら僕に案内を続ける。

「坊ちゃま、こちらが中央広場です。多くの商人がここで商品を売り買いしています」

「すごい……いろんなものがある」

広場には地方から運ばれた珍しい品々が並べられており、見るもの全てが新鮮だった。

その様子を見ていると、父上が隣で口を開いた。

「エルヴィン、広場だけでなく王都の構造全体をよく見ておけ。発明の役に立つ何かを見つけられるかもしれない」

「はい、父上。いろいろ見て回ります！」

父上の助言に感謝しながら、僕は広場を歩き始めた。

広場に面した店舗や露店を見ながら散策していると、一人の若い職人が目に留まった。彼は精巧な装飾を施した小さな彫金具を手にしており、その細やかな作業に僕は思わず見入ってしまった。

「坊ちゃま、興味をお持ちですか？」

ロバートの問いに頷き、僕は職人に近づく。

「すごいですね！こんなに精密な彫金ができるなんて」

声をかけると、職人はにつこり笑って作業の手を止めた。

「ありがとうございます。この道具を使えば細かな模様も簡単に彫れるんです」

彼が見せてくれたのは、魔道具を応用した特殊な彫金ツールだった。

先端には魔力を流すための小さなエルメタル片が組み込まれており、正確な彫り込みが可能になっているという。

「この技術は魔道具の小型化に活かせるかもしれない……！」

職人との会話で新たなアイデアが浮かび、僕はその技術の可能性に興奮を覚える。

その後も、広場を歩きながらさまざまな職人や商人と出会った。

中にはカレドリア学院の研究者が来店しているブースもあって、そこでは最新の魔道技術が紹介されており、僕の興味を引きつけてやまなかった。

「エルヴィン、これはどうだ？」

父上が手にしたのは、『マギステライト』と呼ばれる『魔力触媒』だった。研究者の説明による

と、この触媒は魔力を効率よく集中させる特性を持ち、内部に組み込まれた微細な魔道文字がエネルギー消費を最適化しているという。また、マギステライトは魔力の流れを安定させるため、過剰な魔力の流入による道具の損傷を防ぐ効果もあるとのことだった。

「すごい……これを使ったら、魔道具の耐久性を上げられそうです！」

目を輝かせる僕に満足そうに微笑みながら、父上はロバートに触媒を購入するように指示した。その後父上が商談に向かうため別行動になり、僕はロバートと共に王都の職人街を訪れることにした。

「坊ちゃん、職人街では貴重な素材や道具が見つかることもございます。慎重にご覧になってください」

ロバートの助言を受けながら、僕は職人街を歩く。

職人街は、中央広場とはまた違う活気に満ちていた。路地裏に並ぶ小さな工房では、それぞれの職人が得意な技術を披露している。

その中で特に目を引いたのは、魔力を通す線細工を専門とする職人の店だった。彼が手がける細工はどれも繊細で美しく、僕の魔道具にも応用できる可能性を感じた。

「これは……どんな技術で作られているんですか？」

職人に質問すると、彼は嬉し^{うれ}そうに道具を見せながら説明してくれた。

「この細工は、エルメタルを極細に加工し、魔力を効率よく通すように設計されています。これを組み込めば、魔道具の精度が大幅に上がりますよ」

「すごい！ ぜひ一つ購入させてください！」

僕はその場で購入を決め、さらなる改良の可能性に胸を躍らせた。

夕方、広場や職人街をさんざん歩き回って疲れた僕たちは、宿に戻ることにした。

宿は王都でも有名な格式高い場所^{ところ}で、広い窓からは街全体を見渡せる。

しばらくすると父上が戻ってきた。商談が成功したらしく上機嫌だ。

食事の席では、父上がその日の出来事を振り返りながら語りかけてきた。

「エルヴィン、今日見たものをどう活かすか考えているか？」

「はい、特に彫金の技術やマジステライトが印象に残りました」

僕が答えると、父上は満足そうに微笑んで、続きを促す^{うなが}。

「私が商談に行った後は、どうしていたのだ？」

「はい、職人街を回って、新しい技術を見つけました。それらを使って、魔道具の改良を進めようと思います！」

「そうか。それなら、この機会に王都で実績を残してみせろ。お前の発明がどのように評価されるか、楽しみにしているぞ。チャンスは自分で掴^{つか}むものだ。王都での時間を有意義に過ごせ」

父上の言葉を胸に刻み、僕は新たな挑戦への情熱を燃やした。

宿の自室に戻った僕は、すぐにスケッチブックを開いて設計案を練り始めた。

「マジステライトをどう組み込めば一番効率が良いだろう……？」

まずは冒険者向けライトの改良案を考えた。現在のエルメタルを基盤にした設計に、マジステライトを組み込むことで、さらに長時間の使用と安定性を実現できそうだ。

「触媒を魔力の流入口に配置して、エネルギー効率を高める……いや、もっと安定した配置が必要だな……」

そこで僕は、職人街で手に入れた線細工のことを思い出した。これ使って設計を見直してみよう。

細工をマギステライトの近くに配置し、魔力をより効率的に流す仕組みを考えた。

「これなら、安定性も向上するはず……!」

さらに、触媒であるマギステライトと線細工を組み合わせることで、魔道具全体のサイズを小型化できる可能性にも気づいた。

「小さくて使いやすい魔道具なら、もっと多くの人に使ってもらえる!」

設計がまとまったところで、僕は早速試作に取り掛かることにした。

父上の期待に応えるべく、僕の挑戦はさらに熱を帯びていった。



翌日は丸一日試作品の製作にあてて、さらにその次の日。

朝から父上に連れられて宿を出た僕は、王都の貴族や商人が集う屋敷の大広間に向かった。

今日は父上の商談の一環で、僕の魔道具を披露する場が設けられていた。

「エルヴィン、お前の発明がどれだけ評価されるか見せてみる」

父上の一言に、僕は気持ちを引き締めた。

大広間の中央に設置したテーブルには、僕が作ったライトや、新たに改良を加えた試作品が並んでいる。その周囲では煌びやかな衣装に身を包んだ貴族や商人が鋭い視線を注いでいた。

「これが私の息子、エルヴィンの手による発明品だ。どうぞお手に取ってご覧いただきたい」

父上の紹介を受け、僕は一歩前に出て頭を下げた。

「よろしく願います!」

最初に注目を集めたのは、冒険者向けに開発したライトだった。僕はその仕組みを簡単に説明し、実際に点灯してみた。

「このライトは、特殊な触媒マギステライトとエルメタルを基盤に設計しています。魔力を効率よく光に変換して、長時間の使用を可能にしました。また、防水性能を備えており、どんな環境でもお使いいただけます」

ライトが青白い光を放つと、周囲からは小さな驚きの声が漏れた。

「こんなに小型で明るい光を放つとは……」

「ここまで効率的な設計の魔道具は珍しい」

興味深そうにライトを手にとって性能を確かめている貴族や商人たちに、僕は説明を続ける。

「この試作品では、新しく購入した魔力線細工も採用しています。この細工を使うことで、魔力の

流れをより安定させ、さらなる性能向上を実現しています」

試作品を手にした一人の商人が、じつくりと観察しながら僕に質問してきた。

「この魔道具は、どの程度の魔力量で動くのか？」

「わずかな魔力量で十分です。一般的な魔力鉱でも長時間の使用が可能です」

「なるほど。それなら、特別な資源を必要とせず、多くの人に使ってもらえそうだ」

その言葉に、僕はほっと胸を撫で下ろした。

説明が終わる頃には、僕の魔道具に興味を示した多くの貴族や商人から、商談や注文の話が舞い込んできた。

その言葉が僕にとって何よりの励みだった。

夕方、披露を終えた僕たちは宿に戻って、父上と成果を振り返った。

父上は満足げに頷きながら、僕に言った。

「よくやった、エルヴィン。お前の発明は確かに評価されている。今日の反応を見てどう思った？」

「はい、とても嬉しかったです。でも、もっと改良の余地があるとも感じました」

「その気持ちを忘れるな。王都は挑戦と機会に満ちた場所だ。今日の実績を糧に、さらに励むのだ」

父上の言葉を噛み締めながら、僕は次の発明への意欲を燃やしたのだった。



王都での発明披露が終わった翌日、僕は一息つくために宿を出て散歩に出かけることにした。

父上は商談が続き、ロバートはその手伝いで忙しそうだったので、今日は一人だ。

王都の路地裏には、中央広場や職人街とはまた違う顔があった。小さな店での生活感があるやりとりや、子供たちが走り回る姿を見て、なんだか心が和む。

「ねえ、あんたも一緒に遊ばない？」

声をかけてきたのは、この辺りに住んでいる子供たちだった。彼らは縄跳びをして遊んでいて、僕を見つけると手招きした。

「僕も？ ……うん、いいよ！」

久しぶりの同年代との遊びに胸を弾ませながら、僕は彼の輪の中に入った。

縄跳びや鬼ごっこをするうちに、自然と笑みがこぼれる。

普段の発明作業とは違って何も考えずに体を動かすことに新鮮さを感じながらも、すぐに汗だくになってしまった。

「へへ、すごいじゃん！ でも、次の鬼はあんたね！」

「分かった！」

汗を拭きながら全力で追いかける僕の姿に、王都の子供たちが笑い声を上げる。その一瞬一瞬が楽しくてたまらなかった。

鬼ごっこが終わった頃、子供たちが手作りのおもちゃを見せてくれた。

それは、木の枝や布切れを使った簡単なグライダーのようなおもちゃだった。

「これ、どうやって作ったの？」

僕が尋ねると、得意げに少年はおもちゃを持ち上げる。

「適当に枝を削って、布を巻いただけだよ。遠くまで飛ぶんだぜ！」

試しにそのおもちゃを飛ばしてみると、風に乗って意外なほど遠くまで飛んだ。その単純さに驚き、僕は興味を抱いた。

「これ、もっと遠くまで飛ばせるように改良したら面白そうだね！」

「そんなことできるの？」

僕の提案に、子供たちが目を輝かせた。

「うん、多分ね！ 明日持つてくるからまた遊ぼう！」

子供たちと別れて宿に戻った僕は、早速スケッチブックを取り出して設計図を描き始めた。彼らと遊びながら見つけたおもちゃのアイデアを、発明として形にしたいと思ったのだ。

「もっと軽くて丈夫な素材が必要だな……羽の形状も工夫してみよう」

夢中になって設計図を描き続ける僕の姿を見て、ロバートが声をかけてくる。

「坊ちゃま、随分と楽しそうですね。何を作っていらっしゃるのですか？」

「今日、一緒に遊んだ子供たちのおもちゃを改良するんだ！ もっと遠くまで飛ぶやつを作れたら、きつとみんな喜ぶと思うんだ」

ロバートは微笑みながら頷き、「素晴らしい発想ですね。私もお手伝いしましょう」と言ってくれた。

その夜、宿に戻ってきた父上に、僕は今日あった出来事を報告した。

「父上、今日、王都の子供たちと一緒に遊びました！ そこで見せてもらったおもちゃを改良しているところです」

「ほう、お前が遊びをきっかけに発明をするとは面白いな。その柔軟な発想を忘れるな」

父上は感心した様子でそう応えた。

その言葉に、僕はさらに意欲を燃やしたのだった。

翌日、僕は完成した改良版のおもちゃを持って、昨日の子供たちのもとを訪れた。

軽い木材と布を使い、羽の角度を調整することで、より遠くまで飛ぶように工夫したものだ。

「みんな、これ見て！ 新しいおもちゃを作ってみたんだ」

僕が呼びかけると、子供たちはワイワイとはしゃぎながら僕の周りに集まって、おもちゃを手

取った。

「うわ、本当にすごい！ どれだけ飛ぶのか試してみよう！」

実際に飛ばしてみると、おもちゃは風に乗って遠くまで飛んでいった。歓声が上がリ、子供たちは大喜びしている。

「エルヴィン、すごいね！ こんなに遠くまで飛ぶなんて！」

「ありがとう！ 遊びながらもっと改良できることを考えてたんだ」

子供たちと笑い合いながらおもちゃを飛ばす時間は、本当に楽しかった。

遊びの中にも発明のヒントがあり、それがまた誰かを喜ばせるものになる。それが僕の目指すものだと改めて感じた。

◇

子供たちと遊んだ翌日、僕は王都の職人街を再び訪れた。目的は、新しい素材や技術を探して、さらなる発明の可能性を広げることだ。

職人街は朝から活気に満ちていて、道沿いの工房からは金属を叩く音や木材を削る音が響いてくる。

中でも特に目を引いたのは、小さな鍛冶工房^{かじこうば}だった。その店先には、光沢のある金属製品が並べ

られている。

「よう、坊ちゃん。何か探しているのかい？」

店主の鍛冶職人が、屈強な腕で鉄塊^{てつかい}を持ちながら笑顔で話しかけてきた。

「はい！ 魔道具の素材を探しているんです。この金属はなんですか？」

僕が指差したのは、青白い輝きを放つ薄い板状の金属だった。

「これは『ルナティウム』って金属だ。軽くて魔力を通しやすいんだが、加工が少し難しい代物^{しろもの}だな」

僕はその特徴に耳を傾けながら、以前使ったマギステライトとの違いを思い出した。

マギステライトは重さがあるものの、魔力を安定的に通す特性があり、頑丈な基盤として最適だ。一方で、ルナティウムは、軽量で光を効率的に拡散する能力があるが、扱いには慎重さが必要なようだ。

「マギステライトは安定性を求める道具に向いているけど、ルナティウムは軽さと反射性が求められる魔道具に適している……」

その考えを口に出すと、鍛冶職人が笑いながら頷いた。

「その通りだ、坊ちゃん。それぞれの素材を使い分けることが、良い魔道具を作るコツだよ」

その特徴に興味を持った僕は、ルナティウムを使った発明の可能性を頭の中で考え始めた。

「これを少し分けていただきたいのですが、おいくらですか？」

「タダでいいぜ。お前みたいな子供が何を作るのか興味があるからな」
鍛冶職人は笑いながら、ルナティウムの小さな板を僕にくれた。

宿に戻った僕は、早速ルナティウムを使った魔道具の設計に取り掛かった。目指すのは、軽量で持ち運びが簡単な新型ランタンだ。

日常用だから、冒険者用ライトほどの堅牢性はいらないだろう。

「まずは、ルナティウムの形状をどう活かすかな……」

僕はスケッチブックに設計図を描きながら、魔力の流れを効率化する配置を考えた。

さらに光の広がり进行调整するため、ルナティウムに反射板としての機能を持たせることにした。

「これなら、明るさも広がりも両立できるはず！」

そう思っただけでルナティウムの加工に取り掛かってみたものの、力加減が難しくてなかなかうまくいかなかった。弱い力だとビクともしないし、かといって無理に力かけると欠けてしまう。

そこで僕は、ルナティウムの加工を保留して、それ以外の部分を先に仕上げることにした。作業を進めていると、ロバートが部屋に顔を出した。

「坊ちゃん、何かお手伝いできることはございますか？」

「ありがとう、ロバート。ルナティウムを加工するための道具を探してくれるかな？」

「承知しました。すぐに手配いたします」

ロバートの協力もあり、僕は設計をさらに進めることができた。

翌日、僕は鍛冶職人の工房を再訪して、ルナティウムの加工についてアドバイスをもらうことにした。

「坊ちゃん、加工するときは魔力を少しずつ流しながら形を整えるんだ。急に力を入れると割れてしまうからね」

鍛冶職人の手ほどきを受けながら、僕は慎重にルナティウムの加工の仕方を覚えた。

魔力を使いながら少しずつ形を整えていく作業は難しかったが、その分うまくいったときの達成感も大きかった。

「よし、これで形になった！」

完成した新型ランタンを試すため、僕は宿の外に出た。

ランタンを点灯させると、柔らかい光が広がり、周囲を優しく照らした。

宿の人々や旅人たちがその光に感嘆し、僕の周りに集まってくる。

「すごい……！こんなに軽くて明るいなんて！」

「このランタンはどこで手に入りますか？」

「まだ試作品だけど、もっと改良してたくさん作りたいと思っています！」

みんなの声を聞きながら、僕は新しい発明の手応えを感じた。